

Date [使徒の働き^のの学び] (69)

白井 黙

「難局にも目下ない信仰」(使徒 27: 9-26)

「長い間、だれも食べていなかったが、そのときパウロは彼らの中に立って言った。『皆さん、あなたがたが私の言うことを聞き入れて、フレタから船出しなしていたら、こんな危害や損失を被らなくてすんだのです。しかし今、あなたがたに推めます。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もありません。失われるのは船だけです。…ですから、皆さん元気を出しなさい。私は神を信じています。私に語りかけたことは、その通りになるのです。』」

先回、このローマへの航海に関する章は、ルカが昔のギリシャの英雄エリスの物語に比喩し、信仰の英雄パウロを描いたのだという説を紹介しました。今日学ぶところほどそれが如実に示されているものはないように思われます。パウロはローマへ護送される囚人の一人というより、特別な賓客のように白人隊長のエアスは扱っています。それはパウロが放つキリストの香り、人品骨柄のゆえであつたであらう。彼らの船はフレタ島の南西部にある「良い港」で時を過した。「断食の季節」とあるのは、エタヤの祭り「ヨム・キアール」(贖罪の祭り)これは古代イスラエルがバビロン捕囚になった事を悔い改め、断食する祭りである。(最近のイスラエル国は、独立から4度の中東戦争を戦って、圧倒的強さを示した。そのイスラエルが、この断食時に攻められ、緒戦で大敗した。クワダの「ヨム・キアール」戦争である。その後、99年にエジプトとイスラエルの間で、米国が仲介して平和条約が締結された。)ちょうど9月の末に当り、これを過ぎると冬季になり、地中海の航海はできなくなる。船長は「良い港」から65キロ南のピニアスの港での越冬を主張した。しかしパウロは、彼の長い船旅の経験から、「良い港」での越冬の方がよいと言ひ、今動くのは危険であると主張したが、人々は船長の決断を良しとして、南風が吹いたのを機に出航した。ところが中央に高い山があるフレタは南風が吹くと山の上の低気圧とぶつかり突風に吹かれて吹き下す嵐になる。パウロの預言は的中し、航行は難渋する。フレタ島の南端の小島の陰で風をよけ、引いて来た小舟を本船に上げ、船体を0-70で巻き嵐で船板が剥がされない予防を施すが、船は嵐に翻弄される。強く流されると、こんな北アフリカのフレタの沖の浅瀬に乗り上げる危険もあつたので帆を下し、アレキサンドリアで積み込んだ穀物の荷さえ投棄し、はいには船具さえも海中に捨てざるを得なかった。さらに太陽も星も見えない悪天候が続き航行不能になった。(羅針盤がなかった当時、太陽と星の位置で方角を決めた)これは正に絶望状態であつた。これは「ヨナ書」を思い起させる。神の命に逆らつたヨナは、神の意思とは反対のメソポタミアの船に乗る。突然の大嵐になり、人々は各々信じる神々に祈つたとある。ヨナは船底で眠っていたが、船長に起され「あなたがたもあなたがたが信じる神に祈ってくれ」と言われ、この嵐が神の怒りであるや悟り、この嵐は自分が原因だから、自分と海中に投げ込めば嵐は静まると告げ、結果はそのようになった。パウロの場合、この遭難はパウロの預言に従わなかつたために起つた。ヨナの時、乗客全員の命のカギはヨナが握っていた。この場合、乗員276名の命のカギはパウロが握っていた。パウロは立ち上つて皆に奨励した。先ず、彼の預言が正かつた事を皆に思い起させた。そして、励(の)ことはとかけた。パウロは、どんな難局に当つても、その復活の主への信仰がめぐることを言ひ、「めぐる」とは「目下る」と書く。落ち込むときは、人の目は常に下る向く。しかしパウロは、常に天を、上を見上げる。昔の歌で「せん方尽くれども、望みと失わざりしもの」(IIコリント 4:8)今の歌では「私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。」

パウロはまた同じIIコリント1:4で、「神はどのような苦しみのおきにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちに慰めることができず。」と書いています。

船というのは色々なことを連想させます。主イエスも船でガリラヤ湖を渡られました。「すると激しい突風が起り、舟は波をかぶって水でいっぱいになった。」ガリラヤ湖でも高いヘルモン山から吹き下す突風によって突然の嵐におそわれた。「ところがイエスだけは、ともほうで枕をして眠っておられた。」この嵐の中で、船が沈みかけているのに主イエスだけが平安のうちに眠っておられたと言う。弟子たちはイエスを起して言った。「先生、私たちはおぼれて死にそうでも何とも思われないうのですか。」私たちも、弟子たち同様、またパウロのときの人々のように、パウロの良き勧めを聞かず、自分たちの判断にまかせて出て行くが、その結果は、「人事を尽くせど、どうにもならない惨嘆たる状況に追い込まれる。」沈みゆく泥舟にいる」とはこの事である。そんなとき、大自然を造られ支配しておられる主は、手枕して眠っておられる。「わか平安を汝らに残す」と言われた主イエスのお姿である。私たちはどうであろうか。そんなとき、目ごころの信仰は目下で、「神も仏もあるものか!」とか悪口雑言をまき散らす。「私たちが溺れて死んでもかまわないのですか!」と。しかし主イエスは起き上って、風をかりつけ、潮に「黙れ、静まれ」と言われた。すると風はやみ、大なまじになった」とあります。パウロも言います。「元気を出しなさい。

あなたがたのうち、いづれを失う人は一人もありません。失われるのは船だけですよ。」そう彼をして言わせるものは何でしょう。「私は神(天地の創り主、全能の父なる神)を信じています。私に語られたことはその通りになるのです」という絶対の神への信仰でした。「使徒の働き」を読んでくると、パウロはずっと主イエスからの励ましのことがありました。先ず、エペソにいた時、パウロの心のうちに「私はそこに行つてからローマも見なければならぬ。」(使徒19:21)と主は彼に決心させました。次に彼がエルサレムで逮捕された夜、「あなたはエルサレムでわたしのことをあかしたように、ローマでもあかししなければならぬ。」と言われ(使徒23:11)。カイザリアでも主イエスは「私はカイザルに上訴します」と申し立て(使徒25:11)るように彼を導かれました。

そして今、この嵐の中で、初めて主の使いを遣わし、「あなたは必ずカイザルの前に立ちます」と保証されたのです。パウロの励ま(のことは、単に「元気を出せ!」「cheer up」(顔を上げよ、目下すた、目を天に向かふの意)と言うのではなく、みこばに根ざしたものです。彼の信仰は、父祖アブラハムの信仰に根ざしています。パウロ自身、アブラハムを「彼は望みえないときに望みを抱いて信じた」と言い(ローマ4:18)。ヘブル11:1では「信仰は望んでいる事から保証し、目に見えないものを確信させるものです。」と書いています。パウロはまた「神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。」「ですから、皆さん、元気を出しなさい。すべて、私に告げられたとやうになると、私は神によって信じています。私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」このパウロの励ましのことはほんじにか乗員276名の人々の心を奮い立たせたことではなう。